

I 思索と方法

『生の闘争』自序

『生の闘争』は、最近二年間の、多少の僕自身の表現である。僕は今、この僕自身について、何等の謙遜、弁解、または傲慢の辞をもって、さらに自ら説く要はない。それはすでに、本書の中に、かなり十分に現されているからである。

僕はただ、この僕自身が、真にその生に忠実ならんとする多くの人々に、必ず多大の暗示もしくは共鳴を感じしめ、また多大の力を寄与すべきことを確信している。そしてこの確信は、僕をして本書を公けにせしめた、重要な一理由であった。

生の闘争は、理論ではない、事実である。ただその事実がいかなる形式の下に現れるかは、生の内的状態と外的状態すなわち境遇と気質と思想とに係わる。そして僕は、境遇と気質との接触がこの闘争形式を決定する主要素であることを認めるとともに、その接触から生じた思想もまた等しく一主要素であり、かつある意味においては、むしろ最後の決定的要素であること

を信ずる。これゆえに僕は、ことに僕の思想について、僕と所見を異にする人々の真実なる批評を求める。僕が、僕自身とは多少立場を異にする馬場孤蝶、生田長江、相馬御風、堺利彦の四氏に、本書の序文を求めたのも、この意味からであった。

一九一四年八月二十二日

大杉 栄

『正義を求める心』 自序

僕の論文集が三つあった。『生の闘争』と『社会的個人主義』と『労働運動の哲学』とがそれだ。そしてその三つとも、今では容易に手にはいらない。前の二つは絶版し、最後のは禁止されたのだ。

で、この三つの本を一つにまとめてまた出して見たら、という話が幾度も持ちあがった。最近では、一昨年の冬の入獄の時にもその話があった。そしてこんどまた、本年二月の僕の病氣の際に、いよいよそれを本当にしようという話になったのであった。

第一篇から第三篇までは、今言った三つの論文集の中の主なものを集めたものだ。みんな七、八年前に書いたものなんだから、いろいろ気に食わぬところもあるが、論旨も文章もすべてもとのままにして置いた。大体は今とそう大して違うこともないんだから。

『社会的個人主義』も『労働運動の哲学』もずいぶんたくさん抹殺された。しかしこんどは、ありがたいことにはそれが大ぶ生き返った。その代りに、前にはまったく無事であった『生の闘争』が、あちこちに創をした。ことに、その中の一篇「鎖工場」のごときは、完膚なきまでにならまだしも、まったくあとかたもなく削り取られてしまった。

年代順にすれば、第五篇がそのすぐつぎに来る筈だ。いずれも四、五年前に書いたもので、特に民衆芸術についてのものを集めた。『正義を求める心』という題は、この中の一篇から取った。

第四篇は、一昨年冬の入獄前後に、その当時日本に勃興しかけた労働運動を評論した、僕の最近の論集だ。

附録の「青年に訴う」〔編者註・本選集「青年に訴う」に所収〕は、クロボトキン自身も言っているごとく、クロのもっともお得意のものだ。そして二十あまりの諸外国語に翻訳されて、クロの著書の中でももっとも広く読まれている。

僕はかつてそれを、もう十三、四年前のことだが、『日刊平民新聞』に記載した。そしてその最後の一章のために、秩序紊乱という名の下に、二た月か三月牢に入れられた。

その留守中に、クロから故幸徳に手紙が来て、「自分の著書の中でもっともモデレエトな

(温健な) あんなもののために、その自由を犠牲にした若い同志に」云々とあった。

その後三、四年して、その翻訳はアメリカにいる同志の団体の社会革命党から出版され、その幾百部かは日本にもはいって来た。

こんどはそれを全部書きかえたのだ。

最近それを週刊『労働運動』に連載した時には、ほとんど無事であったのが、一まとめにするとなると無残にやられてしまった。

仕方がない。あきらめられぬとあきらめるんだ。

こんなふうに、僕の入獄中や病氣中に編集されたもので、材料の選択やその他のいろいろな厄介なことは大がいに友人の近藤憲二、和田久太郎、伊藤野枝の三君にやって貰った。それと、個人的にはあるそうだが、忙しいところをずいぶん長い間かかって克明に下検閲してくれた、内務省のお役人達にお礼を言う。

一九二一年七月

大杉 栄

思索人

動物人・機械人・思索人

比較人類学の教えるところによれば、人の頭蓋は、そしてまたその容れている脳髓は、太古の粗石器時代以来のみならず、もっと比較的に近い時代の三千年この方、著しい進歩と発達とを遂げているという。

あらゆる人種は、その初めから、互いに相衝突し、相混交し、相累重し、時としてはまた互いに相駆逐し合っている。そしてその各人種の間には、それぞれの否むべからざる体型の相異がある。けれども今概括して見れば、あらゆる人種の口吻の突出が和らぎ、クロマニオンや何かの猿そっくりの型が著しく消滅したことは争われない。そして今日でも現に、齒の数が文明人の間には減って行く傾きがある。要するに顎のあたりの部分が小さくなって、額のあたりの部分がようやく大きくなって来る。思索の働きが増すにつれていよいよその器官の完成が求められる。

われわれ人類という種族の初め、詳しく言えばわずかに音節のある言葉を食べていたことをもって、その兄弟の類人猿と区別せられた遠い太古においては、自己保存と生殖とのことに限られていたその思想を作り出すためには、何も大きなそして純化した脳髓を持っている必要もなかった。けれども、やがて人類がその周囲のあらゆる力を防禦しさらになお攻撃するようになってからは、そしてまた、物質上の欲望の満足が多少確かめられるようになってからは、そろそろと思索の必要が生じて来た。動物人はさらに優秀なる型の人類に進まねばならなかった。

しかし祖先の影響はなかなか消え去るものでない。改善の歩みは遅い。そして今日なお、時として動物型の人が突然としてわれわれの間に出現する。

胎児が九カ月の間母の胎内にあって、漸次虫となり魚となりおたまたま、くしとなり四足獣となって、そのあらゆる祖先の動物の型を再現することや、または胎児の間にその発達を礙げられて、下等動物の型を持って生れ出た子供のことなどは言うまでもない。しかしその身体の上やまたはその精神の上において、ある動物、しかも傍系の関係しかないある動物を思わせるような人を見るのも決して稀れなことではない。

ブルドッグやむく犬の型の、そしてまた、それらのものの性質を持った夫人や、額の低い頻

骨の尖った、眼の鋭い、残忍な本能を持っている狼人や、長い顔の狡猾な狐人や、または羊人や獅子人や猿人などに出っ食わすのも決して稀なことではない。

けれどもこんな型の人は、今でこそ例外ではあるが、過去には規則であったに違いない。思索人はまだ存在しなかった。ただ動物人のみがいた。その肉体上や精神上的の性質が、ただにその直接の祖先の類人猿のみならず、またそのいとこぐらいの他の哺乳類にも似た畜生人のみがいた。

そして今日われわれが稀に個人の間に見ることのできるこの動物人は、群衆の間になおはなはだしい勢力を残している。昔予言者や軍将の一挙手一投足は、たちまちにして群衆を騒ぎ出させて、他の群衆の上におどきからしめ、遠い遠い、時としては想像の国にまで押し寄せしめた。トロイ、カルタゴ、ローマ等の戦はみなこれであった。猛獣の餌食に与えられたキリスト教信者の前に、そして少しく下っては、血の臭いに餓えたるインキジョンの執行人に与えられた異教徒の思索家の前に、手を打って喜び叫んだ群衆も、これであった。けれども今日の群衆を見よ、アナキストの上に吠えかかったかの群衆は、獣の群と言わずしてはた何と言い得ようか。孤立して見れば物の理窟も分り、隔世遺伝の残忍性から解かれたような個人も、一たび群衆の勢力の下に投げ入れらるれば、再びもとの猿に帰り、犬に帰り、狼に帰る。

動物人はやがて機械人となった。今日の多数者はみなこの機械人である。

彼等はその昔の祖先の食人種の残忍は残していないが、まだ思想という力強い光と、その個性の自覚とを持っていない。時としては、その野蛮時代や未開時代の残忍性とともに意志し行爲するの勇氣までも失っている。彼等は猛獣の域を脱して、機械となった。規則とか制度とか習慣とかいう重荷の下に圧しつぶされて、ただ尊敬の恐怖をもってその重荷を仰いで、伝習の奴隸となり、周囲の奴隸となり、その他あらゆるものの奴隸となっている。狼犬が番犬となった。そして自分の傍へ同類の来るのを嗅ぎつけると、急に歯をむき出して、弱い孤立者に噛みかかる。

けれども昔からの動物人と今日の機械人との間に、さらに思索人が起りつつある。思索人はまた近代人とも言われる。

近代人の脳髓には、多少混雑した思想が湧き返っている。しかし彼等はまだ受動的たるを免れない。過去の重荷はまだ彼等の上に圧つかぶさっている。彼等はまだ自由思想家にして祈禱会に行くの徒である。

かくして近代の思索人は、周囲のために束縛せられ、窒息せられて、そしてそのクワリテがヴァイスに変わってしまうのが多い。勇氣は無感覚になる。緻密は狡猾になる。寛仁は盲目になる。先見は利己になる。

けれども近代人の一部には、その理知の純化が、鉄火に遭うたびにますます鍛練せられて、不断の闘いを闘い、しかもその間に彼等の溫柔と鋭感と細心とを持続させて行く部類がある。

しかもこの種の思索人は、なおはなはだ少数ではあるが、しかしますます増加しつつある。彼等の中のものとも偉大なる思索家の周囲には、彼等の前に跪いて讃歎の眼をみはりながら彼の言を聴く数人あるいは数十の弟子というようなものは、もはやいない。けれども数千数万人の人が彼等と同じ言葉を語り、同じ精神的生活を営んでいる。そして跪いて聴くかわりに、彼等と討論して、かえって彼等の思想を補足し、あるいは修正している。

今日の人類の型は思索人の型である。そして一方にほとんど超人とも見るべき大思索人が存在するとともに、一方にはまた、過去の動物人や畜生人が残っていて、この二者の間には自ら動くことを知らない機械人や、または多少自ら動き出してその手足を損傷したいわゆる近代人に満ち満ちている。

われわれは本当の思索人たる超人に進まなければならぬ。動物人固有の勇氣と機械人が産んだ思索とを左右の手に提げて、あくまでも奮進しなければならぬ。

奴隷根性論

一

斬り殺されるか、焼き殺されるか、あるいはまた食い殺されるか、いずれにしても必ずその身を失うべき筈の捕虜が、生命だけは助けられて苦役につかせられる。一言にして言えば、これが原始時代における奴隷の起源のもっとも重要なものである。

かつては敵を捕えればすぐさまその肉を食らった赤色人種も、後にはしばらくこれを生かして置いて、部落中寄つてたかつて、てんでに小さな炬火をもって火炙にしたり、あるいは手足の指を一本一本切り放ったり、あるいは灼熱した鉄の棒をもって焼き焦したり、あるいは小刀をもって切り刻んだりして、その残忍な復讐の快楽を貪った。

けれどもやがて農業の発達は、まだ多少食人の風の残っていた、蛮人のこの快楽を奪ってしまった。そして捕虜は駄獣として農業の苦役に使われた。

また等しくこの農業の発達とともに、土地私有の制度が起った。そしてこのこともまた、奴

隷の起源の一大理由として数えられる。現にカプールの部落においては、貧乏という言葉と奴隷という言葉とが、同意味に用いられている。借金を返すことのできない貧乏人は、金持の奴隷となって、毎年の土地の分配にも与からない。そして犬と一緒に主人の意のままに働いている。

かくして従来無政府共産の原始自由部落の中に、主人と奴隷とができた。上下の階級ができた。そして各個人の属する社会的地位によって、その道徳を異にすることが始まった。

二

勝利者が敗北者の上に有する権利は絶対無限である。主人は奴隷に対して生殺与奪の権を持っている。しかし奴隷には、あらゆる義務こそあれ、何等の権利のあろう筈がない。

奴隷は常に駄獣や家畜と同じように取扱われる。仕事のできる間は食わしても置くが、病気が不具にでもなれば、容赦もなく捨てて顧みない。少しでも主人の気に触れば、すぐさま殺されてしまう。金の代りに交易される。祭壇の前の犠牲となる。時としてはまた、酋長が客膳を飾る、皿の中の肉となる。

けれども彼等奴隷は、この残酷な主人の行いをもあえて無理とは思わず、ただ自分はそう取扱われるべき運命のものとはかりあきらめている。そして社会がもっと違ったふうに組織される

ものであるなどとは、主人も奴隷もさらに考えない。

奴隷のこの絶対的服従は、彼等をしていわゆる奴隷根性の卑劣に陥らしむるとともに、また一般の道徳の上にもはなだしき頹敗を帰さしめた。一体人が道徳的に完成せられるのは、これを消極的に言えば、他人を害するようなそして自分を墮落さすような行為を、ほとんど本能的に避ける徳性を得ることにある。しかるに何等の非難または刑罰の恐れもなく、かつ何等の保護も抵抗もないものの上に、容赦なくその出来心のいっさいを満足さすというがごときは、これとまったく反対の効果を生ずるのは言うまでもない。飽くことを知らない暴慢と残虐とが蔓こる。

かくして社会の中間にあるものは、弱者を虐待することに馴れると同時に、また強者に対しては自ら奴隷の役目を演ずることに馴れた。小主人は自らの奴隷の前に傲慢なるとともに、大主人の前には自らまったく奴隷の態度を学んだ。

強者に対する盲目の絶対的服従、これが奴隷制度の生んだ一大道徳律である。そして主人および酋長に対するこの奴隷根性が、その後の道徳進化の上に、いかなる影響を及ぼしたかは次に見たい。

先きにも言ったごとく、奴隷は駄獣である、家畜である。そして奴隷はまず、家畜の中の犬を真似た。

カフィール族はその酋長に会うたびに、「私はあなた様の大でございます」と挨拶をするという。しかし自分の身を犬に較べるこの風習は、ただに言葉の上ばかりでなくその身振りや処作においても、人間としての軀の形の許せるだけ犬の真似をするということが、ほとんど例外もないほどにいたるところの野蛮人の間に行われている。

まずその一般の方法としては、着物の幾分かを脱いで、地に伏して、そして土埃を被るにある。

アフリカは奴隷制度のもっとも厳格なところであった。したがってこの犬の真似の儀式も、ほとんど極端なまでに行われている。

アルゲン島附近のアザナギス族は、酋長の前に出ると、裸になって、額を地につけて、頭と肩とに砂を被る。イシニー族もやはりまず着物を脱いで、腹這いになって、這いながら口へ砂をつめる。

クラツバートン氏によれば、氏がカトウンガの酋長に謁見した時、二十余名の大官がいずれ

も腰まで裸になって、腹這いになったまま顔も胸も土まみれになって酋長の傍へ這いずって行って、初めてそこに坐って酋長と言葉を交えることを許されたのを見たという。

ところがこの貴族等はまた、自分が酋長に対してやることを、同じようにその臣下のものに強いる。バロンダ族の平民は、道で貴族の前に出ると、四這いになって、体や手足に土をぬりつける。キアマ族もまた貴族の前に出ると、急に地べたに横になる。

ダホメーの酋長の家では、臣下は玉座の二十歩以内に近よることを禁ぜられて、ダクロと称する老婆によって、酋長へのいっさいの取次ぎをして貰う。まずその取次ぎを請うものは、ダクロの前へ四這いになって行く。そしてダクロはまた四足になって、酋長の前へ這って行く。

四

野蛮人のこの四這いの奴隷根性を生んだのは、もとより主人に対する奴隷の恐怖であった。けれどもやがてこの恐怖心に、さらに他の道徳的要素が加わって来た。すなわち馴れるに従ってだんだんこの四這いの行為が苦痛でなくなつて、かえってそこにある愉快を見出すようになり、ついに宗教的崇拜ともいふべき尊敬の念に変わってしまった。本来人間の脳髄は、生物学的にそうなる性質のあるものである。

そして酋長は他の人間以上のあるものになってしまった。

ナチエーの酋長は太陽の兄弟であった。そしてこの資格をもって、その臣下の上に絶対権を握っていた。酋長の嗣子は生れるとすぐに、その時母の乳房にすがっているいっさいの嬰兒の主人であるとせられた。

中央アフリカにおいても、大中小の酋長はいずれもみな神権を持っていて、自由に地水風火の原素を使役する。ことに雨を降らすに妙を得ている。

バツテル氏によるに、ルアゴンでは畑に雨の必要があると、酋長に願って空に弓を射て貰う。これは雲にそのつとめを命じさすのである。

そこで人民が酋長に雨乞いを願うと、酋長の方からはその代りに租税を要求するというような争いが起きる。「羊を持って来なければ雨は降らせぬ」などと威張る。また洪水の時などには、麦幾許を納めなければ永劫にあらしがあなど嚇す。

ブーサ族の酋長が、ヨーロッパでは一夫多妻を禁じていると聞いて、「外の人にはそれも善からうが、しかし酋長には怪しからんことだ」と言ったという。

アシャンチ族の酋長は、いっさいの法律の上に超絶していて、酋長の子はどんな悪事をしても罰せられることがない。そして臣下は酋長のために死ぬことを至上の義務と心得されている。

五

なおこの時代の野蛮人は、一般にごくお粗末な靈魂不滅觀を抱いていた。すなわち人が死んだ後、なお幾許かの間、生きているものと信じていた。死人の影が、地上の生活と同じような生活を、どこかで続けているものと信じていた。

そしてこの天上の生活は、ことに大人物にのみ限られていた。平民や奴隸はこの世限りで死んでしまうのである。そこで大小の酋長が死ぬと、食物だの、武器だの、奴隸だの、女だのと、いろいろなものをその未来の生活に伴って行く。

カライプ族の酋長が死んだ時に、その妻の一人と一緒に葬られた。彼女はこの酋長の子を幾人か生んだというので、ことにこの役目に選ばれたのである。

かつてハワイで、ハワイナポレオンと称せられた、大虐殺王タメハメハの死んだ時などは、大勢の人間の強制的犠牲を供えたのみならず、なお無数の忠良な臣下が自殺しまたは自ら傷つけて不具になった。そしてその後数年間、国民は毎年その日に糸切歯を抜いて、タメハメハを祭った。

ベナン族の酋長の葬式には、墓の側に徳利形の大きな深い穴を掘って、その口から大勢の奴隸や召使をはおり込んで、そこに餓死さしてしまう。

アシャンチの酋長が死ぬと、その親族のものは外に走って出て、手あたり次第に道に会う人を殺す。それから数百または数千の奴隸の首をしめる。そして時々また、何か事のあるたび

に、天上の會長に使いするために、幾多の奴隸を殺す。

六

僕はあまりに馬鹿馬鹿しい事実を列挙して来た。今時こんなことを言つて、何のためになるのかと思われるような、ペラボーな事実を列挙して来た。けれどもなお僕に一言の結論を許して戴きたい。

主人に喜ばれる、主人に盲従する、主人を崇拜する。これが全社会組織の暴力と恐怖との上に築かれた、原始時代からホンの近代に至るまでの、ほとんど唯一の大道徳律であつたのである。

そしてこの道徳律が人類の脳髓の中に、容易に消え去ることのできない、深い溝を穿てしまつた。服従を基礎とする今日のいっさいの道徳は、要するにこの奴隸根性のお名残りである。

政府の形式を変えたり、憲法の条文を改めたりするのは、何でもない仕事である。けれども過去数万年あるいは数十万年の間、われわれ人類の脳髓に刻み込まれたこの奴隸根性を消え去らしめることは、なかなか容易な事業じゃない。けれども真にわれわれが自由人たらんがためには、どうしてもこの事業は完成しなければならぬ。

征服の事実

梶牛全集の中に、ブランドスの何かの本から抜いた、次の文がある。

「少なくともヨーロッパの四大国民の名は、いづれもみな外国の名である。フランスの名称は、ライン河の西岸に棲んでいたフランク人から来たもので、この国民の祖先たる古のケルト人とは、何の因縁もないのである。イギリスの名は、もとドイツの一地方から来たもので、アングロサクソン民族とは、何の血族上の連絡もないのである。ロシアの名は、もと北方の起原で、スカンジナビアの一族たる、ロゼルの転訛したものである。プロシヤはプロイセンというスラブの一蛮族の名で、十二世紀の終り頃に、ドイツにはいつたのである。」

この事實は、僕が今ここに述べようとすることと、あるいは関係のあるものもあり、あるいはさほどに関係のないものもあるかも知れぬ。けれども、これを読んだ時の僕自身に取つては、これが深い社会事実を思わせる、力強い暗示であつたのである。